

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	谷崎の「刺青」：皮膚から肌への一瞬（いれずみ物語；1)
Author(s)	小野，友道
Citation	大塚薬報 = Otsukayakuho, 612: 65-67
Issue date	2006-01-15
Type	Journal Article
URL	http://hdl.handle.net/2298/3870
Right	

いれずみ物語

1

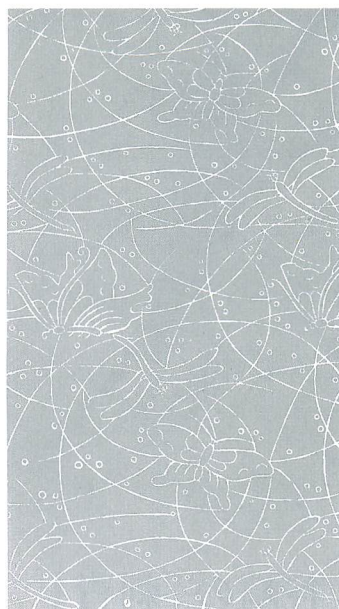
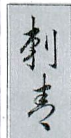
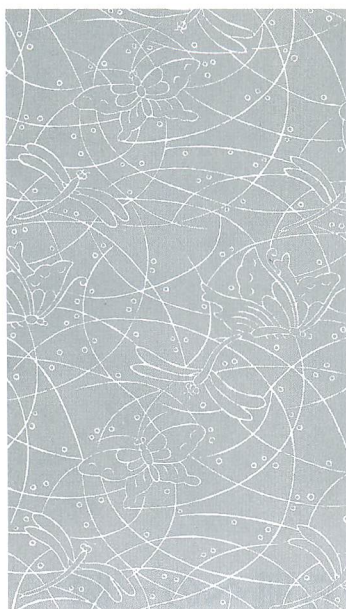
小野 友道

谷崎の『刺青』——皮膚から肌への一瞬——

明治40年代、日本は軍国主義が台頭し、いれずみどころではない時代であった。国家の体面にこだわり、政府は明治41年9月、「警察犯処罰令」を發布した。その第二条二十四号で「自己又ハ他人ノ身体ニ刺文シタル者」を罰するとした。それは何よりこの時代、いれずみが盛んであった証拠に他ならなかった。事実、明治45年には神田の彫字之のいれずみを背負った者が参集して「神田彫勇会」を立ち上げている。谷崎の『刺青』はこのような時勢の下で書かれた。

「馬道を通ふお客は、見事な刺青のある駕籠舁を扨んで乗った。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、鳶の者はもとより、町人から稀には侍までも入墨をした」とある。ここで谷崎は何故、「入墨」と「刺青」を使い分けたのか。「刺青」をいわゆるいれずみの意として用いたのは、実は明治からである。先の「警察犯処罰令」では「刺文」となっている。その前の明治13年制定の刑法にも「刺文」とある。谷崎の『刺青』が世に出るまで「刺青」の用例は見当たらないので、谷崎の独創になる文字と見なされている。しかし、中国では古く

「刺青」の文字があり、それはいれずみのことを指している。現在の中国では「文身」あるいは「紋身」が汎用されていると聞くと、以前は「刺青」も用いられていたという。おそらく中国から入った「刺青」を谷崎が用いたと考えるのが自然であろう。玉林晴朗は『文身百姿』の冒頭で、「<いれずみ>と云ふ事は墨を入れる。即ち墨を皮膚に刺すと云ふ意味であつて、最近では専ら<刺青>と云ふ文字が用ひられて居るが、これでは青い色素でも刺すかの様にも取れる。これは理屈から云へば刺墨と云ふべきだが、結果から見て墨を刺しても青い色素を刺したかの様に見えるので左様に云ったものであろう」といささか「刺青」に批判的である。さらに「現在では刺青と文身と両方の文字が用いられ、称呼としては一般に「いれずみ」と「ほりもの」の両様が用いられている。が然し江戸から発達した処の、あの背中一面に彫る大きな絵図の文身は矢張り<ほりもの>と云ふ方がそれらしくていい」としている。それで、彼の著作の題名は『文身百姿』である。なお谷崎は初版本において、その箱の書名と、中扉の題名には「しせい」とルビしているものの、その他、そして初出以降はすべて「ほりもの」とルビしている。



谷崎潤一郎著『刺青』胡蝶本 表紙

ところで、前述のように谷崎は一方で、「入墨」も使っている。何故か。「入墨」は江戸時代、専ら刑罰として用いられる用語であった。谷崎は「すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」ことを強調したいがために、町人や侍の貧弱ないれずみを醜い弱者として登場させ、そんなもの「刺青」とは言わせないと啖呵をきったのではないか。それで女の惚れる見事な強者の刺青が浮き立った。そのような見事な刺青を「時々両国で催される刺青会では参会者おのおの肌を叩いて、互いに奇抜な意匠を誇り合ひ、評しあった」のである。「アッ」といわせた者が1等となる「文身会」が天保の頃に両国などで催されたという。その1等について玉林が披露している。

その一つ、「肩から背に蜘蛛の巣があり、楓の紅葉したのか二枚ひっかかって居り、其の巣から一本の糸がスツーと下って居て、右足の踝の処で止まり、其処に大きな蜘蛛が一つ彫ってあった者が優勝」した。その他、思いもかけない奇抜な例がいくつも紹介されている。

ところで、刺青師清吉は「心を惹きつける程の皮膚」「光輝ある美女の肌を得て」念願の刺青

を始めるが、さて、「皮膚」と「肌」はどう違うのか。谷崎はどう使い分けているのか。『刺青』には「肌」が7回、「皮膚」が4回用いられている。もちろん皮膚科学会などでの学術用語は「皮膚」であるが、谷川 渥は『刺青』で「語られる皮膚は…即自的な物質的存在としての皮膚ではなく、距離を前提とし、それゆえに欲望を誘発する皮膚、つまり肌である。肌とは、対自性と対他性を含んだ皮膚のことである。つまり皮膚は意識化されることで肌となる」という。その用例の具体は「線と色とが其頃の人々の肌に躍った」「参会者おのおの肌を叩いて」「何十人の人の肌は、彼の絵筆の下に絨地となって」「人々の肌を針で突き刺す時」と最初の4回はいずれも刺青を通して、まさに対自、対他性的に意識された「肌」である。そして「光輝ある美女の肌」「美しい顔、美しい肌」は女そして欲望の対象として「皮膚」が「肌」となった。最後のは「肌を袒いた」である。これは言わずもがな「皮膚」の用語は使えない。一方、「皮膚」の用例はまず「皮膚と骨組み」で、解剖学的表現として用いられ、「肌」は馴染まない。なお、『水滸伝』に「肌骨」の用例があるが、中国からの留学生2人とも、この「肌」は筋肉を

“en block”と呼ばれる周囲の組織を含めて一塊として切除するリンパ節郭清をせねばならない。この考えは、まさしくウィルヒョウがいれずみで、そして乳がんで指摘したそのものである。Mortonらは150年後、そのことを知っていたのかどうか。今や、メラノーマに限らず乳がんなど多くのがんの治療方針に sentinel lymphnode biopsy は欠かせない概念である。

なお、2002年はウィルヒョウが没してから100年に当たっていた。ウィルヒョウは人名辞典によると、作家・編集者・政治家・人類学者・民俗学者・考古学者、そしていわずもがな病理学者であった。吉田富三はウィルヒョウをして「大観し要約して真理の在る方向を示し、混沌の中に一道の正路を見出すことの天才であった」と述べている。

ところで、皮膚に入ったいれずみの色素はどのような運命をたどるのか。いれずみはその個人の一生の間、人為的に取り除かない限り、少しは色が薄くなるものの、確かに存在する。沖縄の90歳のおばあちゃんの、薄くなってしまって血管が透けて見えるその手の甲の皮膚に、まだ若い時のいれずみがちゃんと青く残っていた。皮膚に刺し込まれた色素は、当然0.2mmの厚さしかない表皮を超えて真皮に入る。色素は早晚、貪食細胞と呼ばれる異物処理専門の細胞が取り込む。すべての色素をくまなく取り込んだ細胞は血管周囲を中心に定住する。細胞の寿命が来ると、おそらく次の細胞が取り込んで、ずっとその場所に色素があるというわけである。しかし、本当に貪食細胞だけが色素を取り込むのだろうか、藤田尚男が疑問に思った。いれずみの模様の「桜が梅になることも大蛇が竜に変わることもなく」その場に在るのは「色素や墨がく動かない、そして turnover が遅い細胞」に取り込まれているに違いない。そ

れはおそらく線維芽細胞であろう」と推測した。そしてマウスの実験的いれずみで、皮膚に入った墨は貪食細胞が一気に取り込み、あるものは間もなく近くのリンパ節に移動し、リンパ節が真っ黒になることを見出した。そのリンパ節が紛れもなくウィルヒョウが観察した所見である。しかし、一方で線維芽細胞もそれを徐々に取り込むことを観察した。当時、藤田らの説に、学会がこぞって懐疑的であったという。「異物を取りこむのが単球大食細胞というのは van Furth (1970) 以来の常識であります。したがって、線維芽細胞が異物を取り込むというのは納得できない」という質問にさらされたという。福士は色素がリンパ節から次のリンパ節へも流れ、全身いれずみの場合、肺門リンパ節が腫脹し、リンパ節結核あるいはがんの転移と間違われると記している。また花田は、広範囲のいれずみ患者の2例で、それぞれ1年、6カ月後、皮膚のみならず全身、特に肺に肉芽腫性病変を生じ、肺・肝臓の組織標本で、両者とも色素が認められたとしている。ともかく、色素量が多くなる広範囲例では sentinel lymphnode を超えて色素が次のリンパ節に移行するのは確かなようである。オマケであるが、最近メラノーマ患者の転移を思わせた黒いリンパ節が、実はいれずみの色素のせいであったという報告があった。

(熊本大学 理事・副学長)

主要文献

- 1) 大熊守也、手塚 正、田中 卓：刺青における墨粒子の電顕的局在ならびに粒子の動態に関する考按、臨床皮膚、30；641、1976。
- 2) 川喜多愛郎 解説・梶田 昭 訳：『科学の名著 第Ⅱ期2 (12) ウィルヒョウ』、朝日出版社、1988。
- 3) 花田勝美、山田秀樹、鈴木真理子、大熊達義、羽根田やえ子：瀰漫性肉芽腫性間質性肺炎を伴った広範囲いれずみの二例、臨床皮膚、37；1115、1983。
- 4) 樋野興夫：時を友として ウィルヒョウ没後百年、SCIENTIA、(16)；16、2002。
- 5) 藤田尚男：眼房水産生機構と角膜線維芽細胞の異物摂取の問題、眼紀49；77、1989。
- 6) Morton DL, Wen D-R, Cochran AJ：Technical details of intraoperative lymphatic mapping for early stage melanoma. Arch Surg, 218；262、1992。